

『山河遙か—上州・先人の軌跡』の取材を通して —今、各地に語り継がれる新島襄の志

上毛新聞社編集局前橋支局記者 千明 良孝

新島精神の掘り起こし

群馬県内で地方紙を発行する上毛新聞社（本社・前橋市）は昨年11月1日で創刊120周年を迎えた。この節目を迎えるにあたり、10月末に長期連載「山河遙か—上州・先人の軌跡」を開始した。

この連載は「群馬県」を形づくった先人の軌跡を軸にして、群馬と他の都道府県とのかかわりをたどるもの。先人たちが時代を先取した見識で全国各地に種をまいて芽を出し、多くの人々にどのような影響を与えたのかを、足跡をたどりながら紹介している。

同志社英学校を開校した新島襄につい

て、今年3月10日から全18回にわたって掲載した。同志社関係者の皆さんはご存じかもしれないが、新島は江戸神田一ツ橋の安中藩邸で生まれ育った。この安中藩というのが、現在の群馬県安中市となっている。

群馬県には全国的にも知られるようになった「上毛かるた」という郷土かるたがある。その中の読み札で「平和の使徒 新島襄」と紹介されているように、群馬県内では新島を、明治の宗教家・教育者として誇りに値する人物として取り上げている。

この連載では、新島の軌跡を大筋でたどるように北海道、青森、宮城、福島、

東京、神奈川、京都、岡山、愛媛、熊本の各地で取材。群馬県以外のゆかりの地を訪ね、その地で語り継がれる新島の精神を掘り起こした。

取材は3人の記者が分担して行った。今回の連載のコンテ作りに携わった筆者が北海道、青森、東京、神奈川、京都、岡山の計6都道府県を担当。取材活動を通して触れた各地の取り組みや人々の熱い思いの一端を紹介したい。

街への契機

取材の始まりは岡山県。若き新島がその後の針路を切り開いたとも言える場所である。

JR岡山駅から伯備線の電車で揺られ、備中高梁駅までおおよそ1時間。目的地の高梁市は、四方を山々に囲まれた盆地のような地形の中にあつた。

高梁周辺はかつて備中松山藩が治めていた。新島はこの藩が所有していた洋式帆船・快風丸で航海を体験し、自由の国・米国へのあこがれを強く抱いた。また、帰国後にはこの地を二度、伝道のため訪れている。

ここで昨年11月、キリスト教に関係した地元出身者に焦点を当てた企画「高梁の近代とその人物学」が開催された。そ



「文明開化のシンボル」とされている高梁基督教会（岡山県高梁市）

の目玉として、新島を取り上げた記念講演会が行われた。学校法人同志社の野本真也理事長が講師を務め、800人を超える聴衆が会場を埋め尽くしたという。

地元教育委員会の学芸員は「単なる歴史講演とは異なり、新島の伝道と近代化とが結びつく、という事実が知的好奇心をくすぐり、関心が高まったのではないかと」と、その時の様子を振り返った。

高梁市の取材では、野本理事長が幼少期を過ごした「日本基督教団高梁教会」を訪ねた。教会では21代目牧師の八木橋康広さん（87年神学部卒、神学研究科後

期課程在学中）が
出迎えてくれた。

現存する建物は1889年に建てられた県内最古の教会堂。目を引く白い建物は、地元で「文明開化のシンボル」とされている。

高梁では1879年に福音の第一

声があつたが、キリスト教が一気に広まったのは翌年に行われた新島の伝道だった。説教で感化された二宮邦次郎を仮教師として教会が創設され、その後女子教育の福西志計子、児童福祉の留岡幸助らを輩出していた。

こうした史実を八木橋牧師らが情熱をもって地域住民に広めている。昨年末には高梁市青年経済協議会などが、市内に点在するキリスト教信仰にかかわる史跡をリストアップし、「新島襄と草創期の高梁基督教会の史跡巡り」を行った。その気運を街づくりにつなげようとしている。

キリスト教信仰が高梁の近代化を支えた。その中心的存在だった新島に光が当たり始めていることを実感した。

良心教育の原点

岡山県を後にし、翌日には京都へ入った。新島の命日（1月23日）に合わせ、京都市左京区の「同志社墓地」で行われる早天祈祷会を取材するためだ。

早天祈祷会の前日には、京都御所の東隣にある「新島旧邸」や「同志社大学今

出川キャンパス」を見て回った。今出川キャンパスの正門近くには有名な「良心碑」があった。新島が晩年、同志社英学校の在學生にあてた手紙の一節が刻まれている。

新島は、「知育」だけでなく、「徳育」を合わせた教育で「二国の良心」ともいふべき人物を輩出しようとした。これは同志社教育の根幹である「良心教育」を表しており、この碑を見たことで「良心教育」の原点に触れた気持ちになった。

大学では野本理事長や大学神学部の本井康博教授に時間を割いていただき、新島の精神を受け継ぐ同志社スピリットについて話をうかがった。

取材の際に野本理事長は、新島が勝海舟にキリスト教教育への協力を要請し、理想の教育を成就するのに「およそ200年」と答えたことに触れ、「新島の言う200年のうち130年が過ぎたところ。大学づくりは続いている」と力強く語った。天国の新島が聞けば、頼もしく思うに違いない。

命日当日は午前7時に始まる早天祈祷会を取材するため、宿泊先のホテルを午

前6時すぎに出発。タクシーで20分ほど走ると、「同志社墓地」のふもとにある「若王子神社」に着いた。早朝のこの時間でも、既に墓地に向かう参列者の姿があった。

降り続く雨の中、参列者の後を追うようにして暗い山道を登った。山頂に近づくとき、ようやく開けた場所にある墓地が目に入ってきた。

悪天候にもかかわらず、祈祷会には100人近い関係者が参列していた。暗闇の中で黙とう、賛美歌などが続き、同志社女子中学校・高等学校の聖歌隊による「寒梅の詩」が合唱された。

祈祷会が終わるころ、ようやく空が白んできた。すると、こけむした墓石群が徐々に現れた。その数は30を超える。中心に新島の墓石が建っていた。墓前で静かに祈る参列者の姿がとても印象的だった。

教育推進の町の手本

早朝に京都での取材を終えると、急いで京都駅から新幹線に飛び乗り、神奈川県大磯町へ向かった。京都で早天祈祷会

が行われる同じ日、新島が臨終した地でも毎年、碑前祭が開かれていると聞いていたからだ。

新島は同志社の大学昇格を目指し、募金活動をしていた1889年秋、病気を押し関東出張に出掛けた際に発病した。そして教え子の徳富蘇峰の紹介で温暖なここ大磯に移った。百足屋旅館の離れにしばらく滞在していたが、最後は妻の八重にみとられ、短い生涯を閉じることになる。

終焉の地を伝える石碑は、町役場に程近い、国道1号沿いの小さな庭園内にあった。新島が息を引き取った百足屋旅館の跡地の一部を整備した場所だ。庭園内には新島が好きだった梅の木が植えられ、数輪の白い花を咲かせていた。

午後2時ごろに到着すると、地元神奈川を中心に同志社校友会のメンバーが早くから集まっていた。京都での早天祈祷会に参列した野本理事長ら学校法人同志社関係者も駆けつけた。総勢で50人ほどになった。

この碑前祭は、学校法人同志社が主催しているが、学校法人関係者だけでなく、

地元の大磯町役場にも参加を呼び掛けている。この日は、町を代表して三好正則町長が参列していた。

午後2時20分。新島が46歳の生涯を閉じた永眠時刻に合わせ、碑前祭は始まった。冷たい雨が降り続く中、参列者が静かに黙とうをささげた。

会場では地元の大磯町詩吟連盟のメン



新島襄の命日に行われる終焉の地碑前祭（神奈川県大磯町）

バーが、新島の作った「寒梅詩」「送歳詩」を吟じた。20年以上前から参加している同連盟は「有名な詩を吟じることができるとは名誉なこと。いつまでも歌い継いでいきたい」と、その意義を語った。

この町は「教育優先のまち」を推進している。三好町長も選挙公約に掲げており、「新島先生が『全身に良心が充満した人材を育成したい』と述べられたことと、私の思いは深く通じる」と語っていた。新島が掲げた「良心教育」は、こんな場所でも目標とされている。

交流生んだ短期滞在

2月中旬には北海道・東北地方への取材に出掛けた。この際に米国へ密出国するため、函館へ向かった新島の足跡をたどるコースを試みた。

まず向かった先は青森県風間浦村。江戸から函館へ海路で向かった新島が、北風と潮待ちのために一時停泊した場所である。

大雪の中を青森空港からレンタカーを走らせて3時間余り。本州最北の地にた

どり着くと、目の前には大しけの津軽海峡が現れた。

この村に下風呂温泉郷がある。新島が父・民治にあてた手紙で『早々に上陸し温泉に入りましたところ、硫黄と塩分が含まれ、入浴後の心地は実に肩から重い荷物をおろしたようでした』（現代語で読む新島襄）とつづつて紹介した、かつての湯治場。国道を走っていると、温泉郷の看板が目に入ってきた。

新島は、この地に数日間滞在した。こうした史実を残そうと、同志社校友会青森支部などが働き掛けをした。提案を受けた村側はこれに協力、村費で寄港記念の石碑を建立した。設置した場所は、この地を舞台にした小説『海峡』を執筆した井上靖の文学碑もある「海峡いさりび公園」。縦1・9メートル、横2・9メートルの巨大な寄港記念碑は、猛烈なふぶきの中でも存在感を示していた。

こうした動きを契機に、村は同志社との交流を始めた。その経緯を聞くため、村の教育委員会がある公民館を訪ねた。室内には新島の漢詩が飾られていた。村は、風間浦中学校2年生を同志社中

学校での体験学習に派遣している。一方、同志社側は同志社大学の海外留学生を村の小中学校に派遣し、授業に参加させているという。

同志社中学校と交流を続ける風間浦中学校にも足を運ぶと、新島をモチーフにした作品が飾られていた。校内には両中学校が交わした色紙が飾られ、次のような宣誓文が書かれていた。「15年の歳月を経ても変わることはない友情の絆を確かめました（中略）友好が永遠に続くことを願う…」

風間浦村は人口2600人ほどの小さな村。それだけに村職員は「寒村の子供たちが京都と何らかの交流ができればと思っていた。すべて新島先生の寄港のおかげ」と感謝していた。

脱国の地での顕彰

新島は下風呂温泉郷から船で函館へ向かった。あいにくの荒天のため、新島同様に船で行くことはできなかったため、JR青森駅までレンタカーでいったん戻った後、特急に乗り込んで函館駅を目指す

した。

新島の時代には想像できなかった青函トンネルを走り抜け、2時間余りで函館駅に到着した。風間浦村に続いて函館市内も激しいふぶきだった。

まず初めに、新島が密出国した場所に建つ石碑を訪ねた。JR函館駅から雪道を20分ほど歩くと、倉庫の裏手にその石碑はあった。観光客でにぎわう近くの赤れんが倉庫群から少し離れた場所があり、さらに悪天候が重なったため、人けはなかった。函館湾に面して建つ石碑の



海峽いさりび公園に建つ新島襄寄港記念碑（青森県風間浦村）



函館湾に面して設置された新島襄海外渡航の地碑（北海道函館市）

台座に「新島襄海外渡航乗船之處」と書かれていた。

新島は1864年、この場所から国禁を犯して米国へ向かった。石碑には「男児決志馳千里…」で始まる七言絶句が刻まれている。脱国に成功し、寄港した函館で詠んだもので、文言には夢に向かう若者の将来への決意がにじむ。

石碑の設置は、1952年に同志社大学から記念碑面が寄贈されたことをきっかけに構想され、その2年後に完成した。現在でこそ周辺は整備されているが、20年ほど前までは雑草が生い茂るような状態で、同志社大学卒業生が草刈りをしながら手入れをしてきた。

地元・函館では2000年に新島らの功績をたたえる「新島襄パトスの会」が結成された。新暦で脱国の日にあたる7月17日前後に碑前祭を開いている。同志社大学OBで同会メンバーの大江哲男さん（44年商学部卒）は「もともと市民に働きかけ、新島の志に目を当てたい」と語っていた。

寄港記念の石碑から150メートルほど離れた波止場には、新島をモチーフにしたフ

ロンズ像が建っている。新島が脱国した時の姿とは異なるが、小舟の上で函館湾を見つめるその姿は、米国を目指す若き青年の気概をよく表している。

この像は函館市が2002年に約1000万円をかけて設置した。同市都市デザイン課は「日本の理想的な未来を夢見る新島をモチーフにし、命をも顧みない心の激しさを表現」と説明してくれた。北の大地でも新島の志は強く影響を与えていた。

新作能でよみがえる

新島の軌跡をたどる連載の最終回は東京編で締めくくった。その中心に据えたのが、新島を題材にした新作能「庭上梅」の上演だった。

公演は新島の生誕165周年を機に企画された。新島が生まれた1月14日の新暦にあたる今年2月12日に東京都渋谷区の国立能楽堂で開催。東京で初めて公演されるとあって、氷雨が降る中、開演30分前には入場口に長い列ができていた。

「庭上梅」は新島の教育理念を主眼にしており、同志社大学能楽部OBらによ

る「紫謡会」が制作に取り組み、同会を指導する能楽師・観世流シテ方の井上裕久さん（79年文学部卒）が謡本を完成させたという。

ストーリーの前半は、神奈川県大磯で病床の新島が、見舞いに来た学生に同志社の発展を願う気持ちを語り、後半では新島が見た夢が21世紀に及んで、学生たちが創立者精神を永遠に伝えることを誓い合うという内容になっている。

2005年に同志社創立130周年記念として、同志社大学で初めて一般公演されているが、京都以外では初めての開催だった。会場には応募した2500人の中から抽選で選ばれた600人が詰め掛けた。

公演が始まると、激かな雰囲気の中で学生、新島の妻、八重に続いて、能面にひげを生やした新島が登場した。静けさが漂う舞台が一気に引き締まった。

能の地謡では、新島の生き方を表す言葉が出てくる。それは1890年に新島が大磯で詠んだ漢詩の一節だった。

《庭上の一寒梅。笑ふて。風雪を侵して開く。争はず。又努めず。自ら占む百

お知らせ

第34回Neesima Room企画展

早稲田と同志社—創立者の想いと交流から

期間：2008年10月1日(水)～2009年1月31日(土)

時間：10:00～17:00(土・日曜日は16:00まで)

会場：Neesima Room(同志社大学今出川キャンパス ハリス理化学館2階)

閉室日：祝祭日、2008年10月30日、11月29日、12月1日、12月25日、
12月28日～2009年1月6日

特別展示「早稲田と同志社—新島襄の弟子たち」

期間：2008年10月31日(金)～11月30日(日)

シンポジウム

テーマ「早稲田と同志社—創立者の想いと交流から」

日時：2008年11月22日(土) 13:30～17:00

場所：明德館1階1番教室(同志社大学今出川キャンパス)

司会：露口卓也氏(同志社大学同志社史資料センター所長、文学部教授)

パネリスト：島 善高氏(早稲田大学社会科学総合学院教授)

出原政雄氏(同志社大学法学部教授)

齋藤洋子氏(早稲田大学大学史資料センター嘱託)

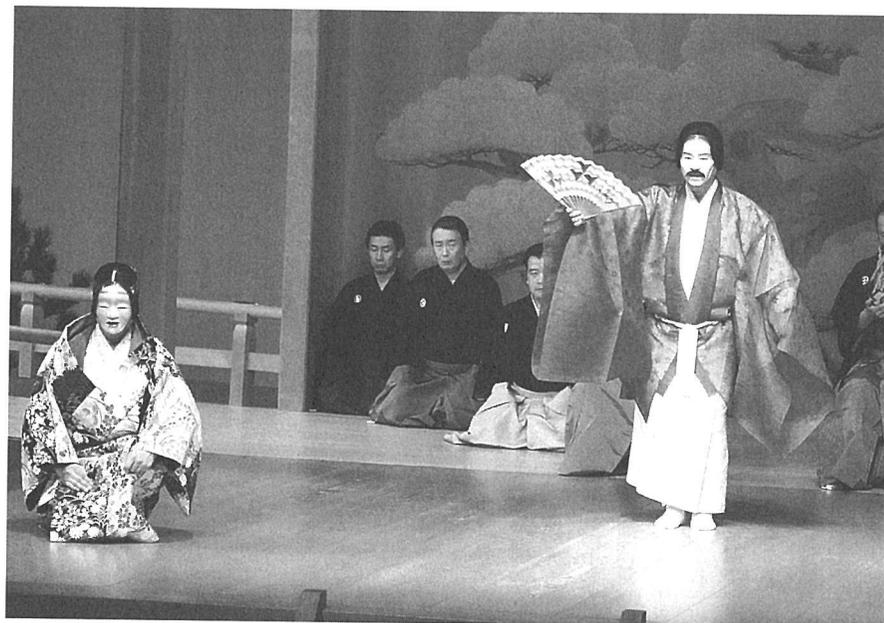
小枝弘和氏(同志社大学同志社史資料センター史資料調査員)

共催：同志社史資料センター、早稲田大学文化推進部

お問い合わせ：TEL075-251-3042 E-mail ji-shasi@mail.doshisha.ac.jp



大隈重信の同志社訪問 旧静和館前にて 1913(大正2)年11月27日 早稲田大学大学史資料センター所蔵



国立能楽堂で披露された新作能(東京都渋谷区)

花の魁はなのかい

新島は、愛した寒梅の咲く姿に自らを重ね合わせた。この言葉を読み返すたびに、新島の気概が伝わってくる。同志社スピリットを受け継ぐ人たちの心には、どのように響いたのだろうか。
大役を演じた井上さんは「全国にいる同志社卒業生に見てもらいたい」と語り、今回の東京公演を機にして全国公演を期待していた。新島の精神が色濃く出ているこの公演が全国各地で多くの人の目に触れてほしいと強く感じた。

各地にあふれる情熱

新島の生涯は、旅の連続だったと言われる。連載の取材にあたり、筆者は新島が関係した都道府県6カ所を訪ねた。新島の人生から見れば、それはほんの一部をたどってみたのにすぎないかもしれない。

ただ、各地に足を運び、出会った人々が語る新島への思いは情熱にあふれ、心に響くものがあった。新島が抱いた宗教観や教育観はしっかりと根づいていた。各地の人々は、先人がまいた種を咲かせようと懸命に活動している。同志社卒業生を中心に続く、こうした顕彰活動が今後も広がっていくことを期待したい。

プロフィール

千明 良孝(ちぎら・よしたか)
上毛新聞社編集局前橋支局記者
1975年、群馬県渋川市生まれ。
専修大学法学部卒業。98年、入社。
編集局編集部を振り出しに、太田支社報道部、運動部、富岡支局を経て現職。